

フィリピン系移民二世の文化的アイデンティティと支援のあり方～当事者からの視点～

Cultural Identity of Second-Generation Japanese-Filipino Youth and Support

津田 友理香 (明治学院大学大学院心理学科臨床心理学コース 博士前期課程)
Yurika Tsuda (Meiji Gakuin University, School of Psychology)

キーワード： フィリピン系移民、アイデンティティ、ニューカマー、エスニックコミュニティ

(1) 問題

1980年代以降、「興行ビザ」や「配偶者ビザ」で来日する人々や国際結婚の増加等により、フィリピン出身者とその子どもは、わずかながら増加傾向にある。2009年末現在、フィリピン人の外国人登録は21万1716人(構成比9.7%)で、韓国、中国、ブラジルの上位3カ国に次ぐエスニックグループとなっている。また、国際結婚の組み合わせとしては、夫日本人-妻フィリピン人の婚姻数が、1万2150件(34%)でトップを占めている(厚労省、平成19年度『人口動態統計年報』)。そのような背景から、フィリピンにルーツを持つ在日2世(以下、日比青年とする)の数は過去13年で累計64万8,719人(総務省統計局、平成21年度『国籍別外国人登録人数』)といわれている。

箕浦(2001)は、アイデンティティの一側面として、「個人が生きている社会・文化システムと自分をどのような関係においてとらえるかを示す自己意識」として文化的アイデンティティを捉えた。つまり、アイデンティティは、自分の集団とその他集団とは異なるという意識によって生まれるとした。わが国では、多文化背景を持つ青年の文化的アイデンティティ研究の動向としては、在日外国人、海外帰国生、留学生などを対象とした研究がなされてきた(大西, 2001)。しかし、日比青年を対象とした研究は少ないことから、本研究では、日比青年の社会文化的背景を調査した上で、文化的アイデンティティのタイプと支援のあり方について考察を行う。

(2) 目的と意義

ニューカマーの第2世代、特にフィリピン系移民特有に見られる個別的アイデンティティの特徴を明らかにしたい。

今後、すでに日本の地域社会で生活しているフィリピン系移民に加え、看護師・介護福祉士の受け入れや新日系人といわれるフィリピン在住の日系人の来日などにより、多様な社会・文化的背景をもつ人への支援が欠かせないと考えられる。そのためには、社会制度・人権などのマクロな視点に加え、当事者自身の意識や認識というミクロな視点でも日本の移民政策を構築していくべきだとの観点から本研究を位置づけたい。

(3) 方法

本研究の対象や調査・分析方法は以下の通りである。

- ① **対象：** 母親もしくは両親がフィリピン出身の青年。主に東京都と神奈川県内の3つのカトリック教会において、ボランティア活動に参加する青年を対象とした。
- ② **フェースシート：** 家族構成、文化的背景(国籍・言語)、帰国頻度等の基本的情報に加え、「自分は〇〇である」というアイデンティティに関する設問に選択式で回答してもらった。
- ③ **インタビュー：** フェースシートの回答をもとに半構造化インタビューを実施した。聞き取り内容としては、家族環境、ピアグループ、来日経緯、コミュニティ(教会や青年団体)への所属意識、アイデンティティの自己認識等である。
- ④ **参与観察：** 年1回のキャンプ等の活動にリーダーとして参加し、約3年間の参与観察を行った。
- ⑤ **分析方法：** 代表的な事例に関する個別のライフ・ストーリーを聴取した。また、データの概念化のために、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」(戈木, 2006)を用いた。

(4) フィールドの概要

本研究でフィールドとしたカトリック教会には、毎週日曜日に英語や日本語でのミサが行われ、様々な国籍の人が集う。そのなかでも、フィリピン系移民は参加人数や活動へのコミットメントが高いということから、親に同伴する子どもたちを対象とした。なお、不定期ではあるが、同教会では、日比児童・青年のための教会学校、日本語教室、またはボランティア団体が実施されていることも特徴といえる。

(5) 結果

インタビューイは、14～24歳の青年計15名(男性6名、女性9名、平均年齢17.3歳)であった。対象者の文化的背景は国籍、使用言語、母国(フィリピン)での滞在年月・帰国頻度において一定の共通点が見られた。

- ① **国籍：** 過半数の10名が日本生まれの日本育ちであり、フィリピン生まれで幼少期に母親と来日したケースは5名であった。対象者のうち13名がフィリピン人の母親と日本人の父親、他2名が両親ともにフィリピン人であった。そのため、幼少期に来日した対象者青年を除き、11名が日本国籍を持つ。
- ② **使用言語：** 家庭内での主言語は日本語で、フィリピン語を習得している者はわずか3名であった。

- ③ **帰国頻度**： 母国に一時帰国ないしは長期滞在する機会も限られており、うち3名は児童期以降に一度も訪れたことがなかった。
- ④ **文化的アイデンティティのタイプ**： 「わたしは〇〇である」という質問に対して、表1に示すA～Fの6種類の選択式で回答を得た。結果、日本人として完全に同化しているAタイプ、様々な日常的なレベルで異化を感じつつ両方の文化を認めるというCタイプが最も多い。「同化」と呼ばれるAタイプには、自らの多文化性や異質性が意識化されるきっかけがなく、その文化的アイデンティティが潜伏しているというケースも見られた。「統合」的なCタイプが多い理由は、毎週日曜日のミサ出席により母国の文化への接触機会が多い、他集団と家庭との価値観や文化の明確な違いの意識などである。
- ⑤ **異文化接触のプロセス**： ベリー (Berry, 1997) によると、ホスト文化との関係重視、あるいは自文化維持の組み合わせにより、「同化」、「分離」、「統合」、そして、「周辺化」の4タイプが提案されている。本研究では、語りの内容分析を行った結果、上記に加え、「潜伏」、「探求」、「混乱」の3タイプが新たに見いだされた。以上のように、③、④、⑤をまとめると、表1の結果となった。

表1：文化的アイデンティティと異文化接触プロセスのタイプ

タイプ	文化的アイデンティティ	異文化接触プロセス	人数
A	「日本人」	同化、潜伏	5
B	「フィリピン人」	分離	1
C	「日本人でもフィリピン人でもある」	統合	6
D	「日本人でもフィリピン人でもない」	周辺化	1
E	「よくわからない」	探求	1
F	「見た目はフィリピン人、中身は日本人」	混乱	1

- ⑥ **文化的アイデンティティの影響要因**： 文化的アイデンティティに影響を及ぼす要因として、被差別体験、ピアグループや教会コミュニティとの関わり、さらには、青年団体に対する所属意識があげられる。
- A) **被差別体験**： 母親と姑の葛藤を見聞する、または日常生活で見知らぬ人による偏見やステレオタイプに関する体験などである。
- B) **ピアグループ**： 自らの文化背景を同級生に打ち明けることは少なく、日常を過ごす傾向がみられた。しかし、コミュニケーションスタイルや価値観の違いで家庭内文化の「異質性」について気づきを得ることで、他集団との境界が形成される。
- C) **エスニックコミュニティへの所属意識**： 教会や青年団体への参加意欲は低く受身的であった。

(6) 考察・今後の課題

日比2世の文化的アイデンティティの特徴は、二文化が共存しているというよりはむしろ、混沌としたなかで揺れ動いている状態ということがいえる。自らのアイデンティティを「どこにも属していない」、「どちらにもなりうるが、いずれも完全にはなりえない」、「ごちゃまぜ」と語っていたように、自らの多文化に対するイメージは、日比青年の複雑な心的状況を象徴的に表わしていると考えられる。そのため、日比青年の文化的アイデンティティ自体が顕在化されていないこと、エスニックコミュニティへの所属意識が低いことが考えられる。その理由として、日本社会におけるフィリピンに対する否定的イメージや間接的な被差別体験が関連していると推測できる。また、コミュニティにおいてエスニック教育ないしは啓蒙活動を担う組織や団体が十分に機能していないことも要因であろう。これらのことから、いずれの文化にも属さないという状態というのは、ディアスポラ (コーエン、2001) の概念を支持するといえる。つまり、在日コリアン二世等で見られる国家・社会等の既成のシステムに捉われない、あいまいなアイデンティティと同様の特徴が見られるということがいえる。

今後の課題としては、エスニックコミュニティとしての教会や青年団体の役割の向上、例えば、自尊感情の向上、母国に対する理解と統合的文化アイデンティティの確立への支援などである。また、当事者が積極的に関与できる自助グループの重要性を強調したい。特に今後、サービスの受け手から担い手となる青年たちの人的資源や生活の質の向上という視点が研究者・実践者双方に求められるだろう。

【主要引用・参考文献】

- コーエン、ロビン (著)・駒井洋 (監訳)・角谷多佳子 (訳) 2001 『グローバル・ディアスポラ』明石ライブラリー 32、明石書店
- Berry, J. W. 1997 "Immigration, Acculturation, and Adaptation". *Applied Psychology, An International Review*, 46 (1), 5-68
- 戈木クレイグヒル滋子 2006 『ワードマップ グラウンデッド・セオリー・アプローチ—理論を生み出すまで』新曜社
- 箕浦康子 1994 「異文化で育つ子どもたちの文化的アイデンティティ (国際化時代の教育—グローバル・エデュケーション〈特集〉)」『教育学研究』日本教育学会 61(3), 213-221
- 大西晶子 2001 「異文化接触に関する心理学的研究についてのレビュー—文化的アイデンティティ研究を中心に—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』東京大学 41, 301-310